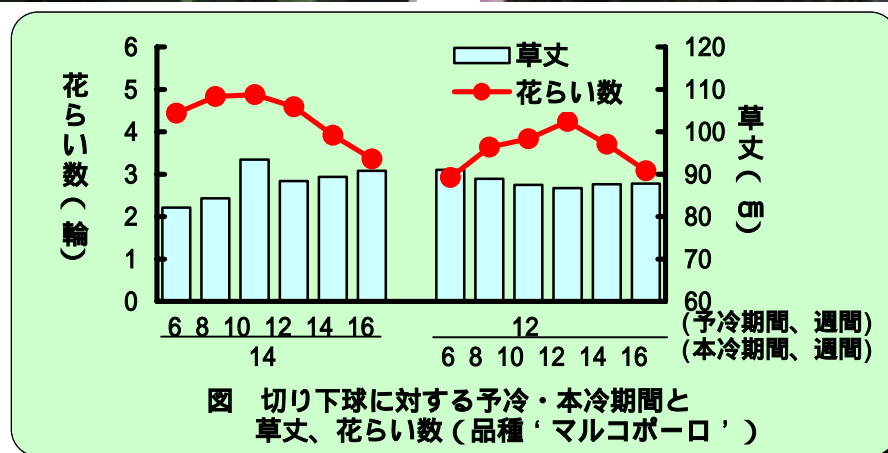


オリエンタル系ユリにおける 切り下球を利用した新作型の開発



オリエンタル系ユリ栽培では、10~11月には良質な輸入球根の安定した入手が難しいことや種苗コストを低減する観点から、切り下球(1度採花した後に残る球根)を利用して10~11月に定植し、1~3月に採花する栽培技術の確立が急がれています。そこで、10~11月に定植するため、5~6月に掘り上げた切り下球に対する予冷(13)や本冷(2)の期間が切り花品質に及ぼす影響を検討しました。

その結果、'マルコポーロ'では、予冷は8~10週間、本冷は12~14週間、'ティバー'

では、予冷は6~8週間、本冷は10~12週間が適当であることが明らかとなりました。

なお、両品種とも予冷期間が長いほど草丈が長くなります。しかし、予冷および本冷期間が前述の期間以上に長い場合には花らい数が減少して切り花品質が低下します。

今後は、総冷蔵期間を一定にした場合における予冷期間と本冷期間の適当な組み合わせ方法について検討する予定です。

(花き科 二宮 千登志 088-863-4918)